



騎馬像がお国入りし、小室吉里、榎木に差しかると出迎える町民の熱狂ぶりは頂点に達した。騎馬像の隣に立つのは小室本人だろう。

政宗騎馬像余話

小室達日記から



▷ 7

百屋の巨像とならば御国入りの儀相整い、昨十五日夜はゆかりも深き白石城下小学教室、さんさしくる野たに最後の便符の夢を結ばれた政宗御、いよいよ仙入りの十六日である。蒼穹(そうきゅう)青空のこゝと澄み渡つて初夏の微風漂い、まことにうつろへ向きの御入りとなつた。(中略) 校門から町外れまで両側十重で干車に埋めたる見送りの人垣、御国入りも歴史的なら、白石町(現白石市)のこの人出も正に近來の驚異であるという。仙台より出迎え隊トバイの一隊が政宗公御国入と赤地に染め抜いた旗をかざして先導となり、数十台の自動車は像の後に従う。

トラックに引かれた政宗騎馬像は昭和十年五月十四日、白河を越え、みちのくに入った。東京をたて二日目。時速十六、七程度のノロノロ運転だから、新幹線時代の今と比べ何と何とものんびりした話ではあるが、このゆたたりとしたスピードが、藩制時代の大名行列を思わせたのである。沿道には大勢の人々が押し掛け、旗を振り、政宗のがいせん歌・さんさ時雨を合唱して歓迎した。感服のあまり十下座し涙ぐみお年寄りもいたという。

この光景をトラックの上から眺めていた制作者の小室達は、こみ上げてくる喜びと興奮を抑えられなかつた。旧制中学時代を過ごした白石、吉里榎木、柴田町が近づくと、感憤の振幅が激しくなつていく。日記をひもひもてまよ

さんさ時雨が歓迎

この時期の新聞報道も群衆の熱気にあおられたか、少々過熱気味である。長くなるが、講談調の記事が当時の熱狂ぶりをよくうさげるので、引用したい。

一百年の昔、江戸参勤交代以来絶え向の御沙汰(ごさた)もかったとこころ、この慶国(うらたに)も十二

熱狂 天守台入り

歓迎を浴びてゆるやかに進ました。三里五里の山道を遠しとせず歓迎の人々々は仙台に近づくとつれも幾何級数的に増え、大河原を九時過ぎ通過、鞍の政郷青葉山はもう間もないのだ。英雄にフタルシアなぬにしても、臣軍生(ひびせいの)の力作、われらが政宗公の像が今ここで一種無量の感涙に打たれていないとはだれが断じ得よう?

(5-17 河北新報)

大河原や榎木では全町挙げて歓迎式が行われ、祝いの酒をくみ交われ、さんさ時雨の合唱が巻き起こる。心配されていた川越えやドロコン道も飯橋や人海戦術を使って通過した。仙台城の大手門はわずき五分(約一・五秒)のまぎ間を残して奇跡的にへり抜けると、数々のエピソードと興奮を残し十六日午後五時、天守台に到着した。

「うん」難儀し連んだんだねえ、兄はトクダウの前に乗っかていてねえ日に焼けて黒い肌になつていた。榎木で小室を迎えた実妹の妹サツキさん(た)と米中さん(た)美輪の目には、故郷に錦にしきを飾つた小室騎馬像が今も焼き付いているという。

他の各町村民の熱誠で幾多の障害を見事に服従(ふくそう)した。巨像は柴田郡登戸村(現大河原町)に在る。感服の片倉勇はこまで御見送り